

母の 668 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

ことばのなかのこどもたち④／今井和子 2
『ちび亀』刊行に寄せて／工藤直子、あべ弘士 3
時代が変わっても、変わらないこと
—2020年の子どもたちに向けて／今森光彦、大豆生田啓友、西山利佳 4
紙芝居の広がりにつながる旅／長友恵子 7
イラスト／杉浦範茂



野に生きる

いわむらかずお

.....

去年の秋も、わたしの美術館のフィールドのあちこちで、さまざまな木の実がみのりました。リスたちはたわわに実をつけたクルミの木にやってきては、大変な手間をかけて割って食べていきました。夏の初めに雪のような白い花を咲かせたエゴの木にも茶色の実がみのり、ヤマガラたちがしきりに突いていきました。木の下にいて耳をすますと、まるでちいさな大工さんたちが大勢集まって、金づちをたたっているみたいです。強い香りを放つカラスザンショウの実は、カラスの群れがカーカー大騒ぎしながらついばんでいきます。生きものたちは、野にある物はそこに生きるみんなの物だと考えているように見えます。

この考え方は当然だと思うのですが、困るのは農家の人たちです。トウモロコシがみのればキツネがやってくるし、キャベツが育てばモンシロチョウが卵を産みつけていきます。田んぼの稲がみのればイノシシがやってきて、穂を口でしごいて食べていきます。田畑も彼らにとっては「野」なのです。

先日、美術館の雑木林でこどもさんへのお土産にと、クリのイガをむいていた女性が、ふと思いだしたようにいいました。「こどもとハイキングにいったとき、イガをむいていたら、『なんで、これが食べられるって分かったの?』って聞かれたんです」4年生になるその子は、イガに入ったクリを見たことがなかったのでしょうか。なんでもないようなその話は、わたしには不思議で、どこか新鮮でもあったのです。

わたしがこどものころは、野にある食べられる物はなんでも口にしていました。クワ、アケビ、ノイチゴ、ヤマイモのムカゴ、ヤマグリ、グミ、ヤマブドウなどなど、食べられることを仲間から教わり、大抵のこどもは知っていました。半分「野」に生きていたからでしょう。

こどもたちが、バッタをつかんだり、花の匂いをかいだり、まっかな夕日を見たり、鳥のさえずりを聞いたり、ヤマグリをかじったり、五感を通じて「野」を体験することが、いま、ますます大切になってきたと思っています。同時にこんな難題も日本のこどもたちの前に立ちはだかっています。

福島原発事故から間もなく9年になりますが、いまだに放射能汚染を気にして暮らさなければならない多くの人々がいることです。故郷を追われ帰ることも出来ない人々の悲しみはいかばかりでしょう。

未来に生きるこどもたちに、どう説明をしたらいいのでしょうか。

(絵本作家)

ことばの

なかの

4

今井和子

こどもたち

いまい かずこ／子どもことば研究会代表。二十三年間の保育士勤務ののち、立教女学院短期大学教授などを歴任。主な著作に『0歳児から5歳児「行動の意味とその対応」(小学館)』『子どもことばの世界』(ミネルヴァ書房)などがある。

●ともちゃん(二歳五カ月)は、夜空を見て、母親に聞きました。

「お月ちゃん、まるまるだねえ。

おかあちゃん、お月ちゃん、

だれちゆくつたの？」

子どもの質問

子どものことばを記録するようになった感じたことは、子どもたちが発する質問の面白さでした。二カ月後、ともちゃん、雲一つない夜空を見て、次のように言いました。

「神ちゃんが、雲をみーんな食べちゃったから、おそらがでてきたの？」

同じ子どもの質問でも、二カ月後にはすっかり成長ふりが感じられます。ともちゃんの心の中に、目に見えない神さまの存在が確かになってきたことがうかがえます。そういう意味でことばは、その折々の子どもの心を表し、育ちを告げる確かなバロメータです。

「疑問を持つことは、問題を発見する力」と言われますが、この時期の子どもたちの質問は、好奇心、探求心から発せられる思考の冒険、科学的・真理探究への第一歩ですね。



くどうなおこ
工藤直子

まぶだち・ちび竜

わたしは「ひと」に生まれました

だから「ひと」と なかよしで すべ「友だち」になります

わたしは「ひと」でない みんなとも 友だちになりたいな と

思っています とり とか ちようちよう とか カマキリ とかね

わたくも とか ケヤキ とか そよかぜ ともね

とりわけ わたしは 空想から 生まれた 友だちが ほしかった

とへに「りゅつ」と 友だちになりたかった！ それも「まぶだち」に！

「まぶだち」って「ほんとうの友だち」という いみなんだよ

というわけで いつも空想しているうちに「ちび竜」がうまれました

ちび竜のことをした あべ弘士さんが おー いいじゃん！ と

ちび竜の「まぶだち」に なってくれて

ちび竜のすがたを いっぱい いっぱい えがいてくれました

そうやって生まれた ちび竜は

ちびだつたり でかかつたり そして かわいくて カッ「いー！

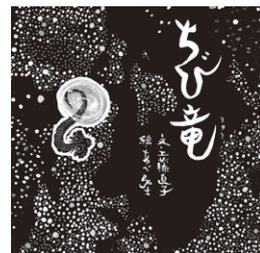
みなさんも ちび竜と「まぶだち」に なってほしいなあ

ちび竜と いっぱい あそんでほしいなあ と とても思っています

・おーい ちび竜 まぶだちになるんだい？

『ちび竜』刊行に寄せて

先月刊行された絵本『ちび竜』。壮大な物語と、迫力ある絵の本作について、作者のお2人に、作品への思いをお寄せいただきました。



ちび竜
工藤直子／文
あべ弘士／絵
本体1,700円＋税

やさしい竜の描き方

知りませんでした。

竜が、雨つぶから生まれてくるなんて。

そしてポウフラと友だちだなんて。

私のアトリエの庭に、バケツやら鉢やらタライやらがあって、その中が水たまりになっていて、蚊が卵を産んで、ポウフラがうじゃうじゃいたんだけど、もしかしてその中に竜の赤ちゃんがいたのかもしれないんだ。こんど見つけて、飼育したい。赤ん坊竜がすこし大きくなって、タンポポの綿毛につかまり、空中散歩する。

クモが自分の糸を空中高く飛ばして、それにつかまり遠くへ移動する。だからこの話は正しい。

トンボに飛び方を習う。このトンボはギンヤンマでなくちゃいけない。なぜなら私の、一番好きなトンボです。

さて、竜はどんどん大きくなる。フナに水界のことを、モグラに土界の術を習う。シカと角合戦する。入道雲の上を三段跳びだ。

ますます、どんどん、すすん、めきめき、巨大化し、とうとう……なんと……。

「地球」を抱いて宇宙空間に浮いているのではありませんか。

私、負けずと絵を描きました。

工藤直子のお話は、いつも壮大でやさしい。そうこの巨大な竜も言っている。「いつも きみの心の中に」「おーい」とね。

ひろし
あべ弘士



『虫愛する子どもたちの昔と今』

今森光彦 (写真家・切り絵作家)

生きもの観察会や昆虫教室などで、私は、毎年数多くの子どもたちに接しています。そんなとき、頭の中をよぎるのは、自分が小学生の頃は、何をしていたらう、ということ。

昔も今も変わらないのは、生きものが大好きな子どもたちが確実にいるということです。熱烈なファンが多い昆虫は、みんなの憧れの的で、昆虫と子どもの間には、大人には分からない不思議な時間が流れているのです。以前は、捕虫網を持って子どもたちを『昆虫少年』という愛称で呼んでいました。今は、女の子もたいへん多いので、『虫愛する子どもたち』と言ったところでしょう。

小さな生命にひかれる子どもたちの感性は、日本独特のもので、それは、科学の心とアニミズムの心を両方兼ね備えている精神とも言えます。

例えば、昆虫教室などで採集したクワガタムシをある子どもは、標本にします。標本にするには、かわいそうですが毒ビンに入れて命を絶ち、おまけに体にピンを刺して固定しなくてはなりません。考えようによってはかなり残酷で、ちよ

時代が変わっても、 変わらないこと

2020年の子どもたちに向けて



イラスト／杉浦範茂

とクールな感覚を持っていないと実行できません。標本が出来上がると、標本箱に入れて整理します。同じ場所では採集した昆虫をまとめることもありますし、種類別に箱を分けることもあります。こ

することによって、いつどこで何がいたかという証拠ができますし、そのクワガタムシがどういった種類で、どんな特徴があるのかも一目瞭然となります。これは、科学の心の芽生えだといってもいいし

よう。

一方、採集したクワガタムシを虫籠に入れて大切に持って帰る子もいます。子どもたちは、何をするかというと、その日一緒に持ち帰った友だちと、クワガタムシを喧嘩させて遊ぶのです。

里山でよく見られるノコギリクワガタやミヤマクワガタは、やや習性が違いますが、どちらも血の気が多くて、すぐフアイティングポーズをとります。大アゴで相手を挟み込んで放り投げた方が勝ちみんな、自分が戦っているがごとく興奮します。

私は、今まで世界の辺境地を取材してきましたが、昆虫と遊んでいる子どもを見たのは、タイだけです。このときは、カブトムシを戦わせていました。日本と同じだと思って興味津々で見ていたのですが、何と子どもたちは、お金を賭けていました。これは、まさにギャンブル。日本の子どものような純粋な遊びとしての昆虫の接し方とは真逆と言えます。

他にも、日本では、古くから鳴く虫の声を楽しむ習慣などがありましたし、小さな生命に入魂する感性を持っていたようです。

このように日本の子どもたちは、科学的な視点とアニミズム的な視点を持ち合わせています。西欧と日本のハイブリッ

ドな感覚の両立こそが特徴なのです。

「虫愛する子どもたち」の感性は、現代でも健在なのですが、以前とは少し違うところもあります。それは、肝心の昆虫たちに接するときのフィールドが充分でないことです。

子どもはその子らしく、 私は私らしく

大豆生田啓友（五川大学教育学部教授）

私は、大学院で幼児教育を専門にし、現場の幼稚園教諭を経験し、その後、ずっと乳幼児教育・保育および子育て支援を専門にしています。現在は、もうずいぶん大きくなった三人の子の父親です。私はこうした専門ですから、当然、よい父親になるに予定でした。が、そうはいきませんでした。実際は、悩みだらけの毎日。イライラして子どもに感情的になることはあるし、妻との子育ての考え方の食い違いもたびたび。子どもが小さなころだけではなく、いまだってそうです。

本来、幼児教育・保育が専門だった私が、いまから二十年くらい前に子育て支援の領域にも研究を広げたのは、私自身のこうした悩みからでした。そこから見

今の子どもたちは、雑木林に行かなくてもクワガタムシを手に入れることが容易です。生きたクワガタムシさえ手に入れば、感性が養われるのではないかという意見もあるかも知れませんが、彼らの生活の舞台である雑木林のことがわから

えてきたのは、現代の子育ての難しさでした。サザエさん時代（昭和初期）と異なり、現代は子育て家庭（とりわけ母親）が孤立しやすい時代なのです。周囲に子育ての協力者はあまりなく、子どもは外で自由に遊ばせていられない。なるべく誰かに預けずに自分でみようと思えば、家で子ども二人つきりですっと向き合っていないといけないのです。しかも、多くの研究者が言うように小さな子どもにテレビやゲームをさせてはいけないと思えば、親がずっと子どもに向き合っていないけません。

さらには、情報時代です。ネット上には「子どもはほめ言葉のシャワーで育てまじょう」など、「よい親」であるための情報がたくさんあります。「子どもへの能力は早期に決まるので、親が子どもに何をやらせたかが大事」など怪しい情報もあふれかえっています。「この子の

ないと、他の生きものたちとの関わりが理解できません。この関わりの中に人間も含まれることが重要です。

身近な自然である里山は、今私たちの前から次第に姿を消そうとしています。

「虫愛する子どもたち」が、豊かな感性

を持ちながら育ってゆける自然環境を後世に残したいものです。それと、生きものが共存する世界で遊ぶ喜びを子どもたちに伝えることも私たち大人の役割のよ

うな気がします。

将来、私次第」なのだと思えば、焦るに決まっています。「よい親」であろうと思えば思うほど焦りながらもなかなかうまくいかないギャップにさらされるのです。これが、現代の子育ての難しさだと思います。

そうした中で、昨年より幼児教育・保育の無償化が始まりました。親にとってはとてもありがたいことだと思います。長時間保育をほぼ無償で預けられるので、良質の保育であれば、〇歳から預けることも問題はありません。そうすると、今後、さらに早期からの共働き家庭が増えるのではないかと予想されます。それはそれでよいのですが、長時間預けられるから子育ての負担が減るかと言え

ば、必ずしもそうはならないと思います。仕事と子育ての両立の大変さもありません。無償化で生まれたお金を習い事等に回そうと思えば送り迎えなどあわたたしい毎

日となるでしょう。それは、かつてのよ

うなのんびりとした家庭生活ではなく

るのかもしれないね。

私は昨年、妻との共著『非認知能力を育てるあそびのレシピ』（大豆生田啓友・大豆生田千夏著、講談社）を出版しました。これは、家庭での普通の何気ない暮らしの中の遊びが実は大切なんだということを書いたものです。非認知能力とは、意志力、自尊心、自己制御、コミュニケーション力など、心や社会的な目には見えにくい力です。それは、子どもが夢中になって遊ぶことやコミュニケーションなどを通して育ちます。この本で紹介したのは、親子ではっぱを拾ったり、触れ合い遊びをしたりなど、たくさん

さんの親子が何気なくやっている遊びがとても多く、それが大事なんだと書きました。実は、多くの親たちは、子育てが難しい時代の中にあっても毎日の暮らし

の中で実によくやっています。

非認知能力を育てる上では、一人一人の個性、つまりその子らしさを大事にする

子どもの本の反撃力

西山利佳 (児童文学評論家)

新年早々辛気くさい書き起しで恐縮だが、「表現の不自由展」攻撃はじめ憂鬱の種が尽きなかった二〇一九年のあれこれから今年を展望するしかない。

まずは、『はじめてのはたらくくま』(講談社ビーンシー) 問題から。二〇一八年十一月に出版されたそれは、よくある幼児向け写真図鑑のように見えながら、帯をはずせばそこに小銃を水平に構える自衛官の写真があり、めくっていくと戦車や戦闘機、護衛艦(もはや、「軍」ですらない!)などがこれでもかと展開している。これに気づきおかしと思うた人の声動きを呼び、子どもの本に関する複数の団体が批判意見を表明した。その結果、同書を今後増刷しないという対応を引き出した。しかし、第二、第三の『はじめてのはたらくくま』が出てくる素地は作られた。現政権は一

ることでもあるのです。そして、親もまた自分らしく、機嫌よくあることが大事なのです。そのためには、イギリスの小

〇一四年に「武器輸出」を「防衛装備移転」などという言葉で可能にした。そして二〇一九年十一月、世界最大規模の武器見本市が幕張メッセで開かれてしまっ

た。萩生田文科大臣の「身の丈」発言もひどかった。しかし、このとき私はすぐに『むこう岸』(安田夏菜著、講談社)を思っている少女と、経済的には恵まれているがモラハラ父に抑圧されている少年の物語だが、これは貧困家庭に生まれた子どもは身の丈にあった進路で我慢しろといった価値観に対して、はっきりとカウンターになっている。

今の社会への異議申し立ての力を感じた本に、「あしたのための本」シリーズ(全四巻、宇野和美訳、あかね書房)がある。四十年ほど前、独裁政治を脱したスペインで作られたテキストを新しいイラストで現代に再生させた本シリーズは、皮肉なこと今この日本社会に対する鋭い、またユーモアたっぷりの批判となっている。

児科医であるウイニコットが言った good enough mother。つまり「ほどほどな母親」がよいのです。時代が変化

韓国の絵本『ヒキガエルがいく』(パク・ジョンチエ作、申明浩・広松由希子訳、岩波書店)にも力を得る。前へ前へと進む力エルの群れが描かれる迫力の絵本は、セウォル号事件の真相究明を求める運動の中から生まれたという。その背景を知らなくても、不屈の魂が伝わってくる。ある方が、この作品は小学一年生の道徳教科書全てに採用されている教材

「かぼちゃのつる」と反対ですねと仰った。確かに、子どもを身の丈に押し込めようとする力へのカウンターになり得るだろう。

さて、原爆の本質を子どもとつながり核兵器の特異性をあぶり出した紙芝居『ちっちゃいこえ』(アーサー・ピナード脚本、丸木俊・丸木位里絵、原爆の図)より、童心社)は、私に新しい目をもたらした。この夏、『ちっちゃいこえ』を体験した後、丸木美術館の「原爆の図」の前に立つと、まるで急に視力が良くなったかのようについに細部がはっきりと見えてきたのだ。それは驚きの体験だった。

しても、大事なことは、「その子はその子らしく、親である私もらしく、現在を共に生きること」なのだと思います。

やはり目を新しくされたように感じた作品に『きみの存在を意識する』(梨屋アリエ著、ポプラ社)がある。化学物質過敏症や書字障がいその他外から見えにくいさまざまな困難を抱える中学生たちが、その存在を無視できなくさせる。

児童書ではないが、児童文学作家でもある森絵都の『カサアナ』(朝日新聞出版)は、フェイスブックの世界像でありながら、現実世界の壁に風穴を開けて見せる。例えば、ニッポンすごいがきままつた状況を「ジャポイ」という軽薄な形容詞で表現する。言葉の、そして物語の力を痛快に知りしめる作品だった。

二〇二〇年の今年、オリンピックの狂躁の中ますます同調圧力は高まることだろう。また、戦後七十五年目の夏でありながら、戦争と平和を考える番組は少なくなるのだろうか。憂鬱の種はますます増えそうではある。しかし、だからこそ、一人一人の存在を尊ぶ言葉の力、物語の力は大切になってくる。憂鬱に負けない児童文学の力は、変わらないと信じてい

紙芝居の広がりにふれる旅

●●● パリ、リヨン、アントワープ、
そしてアムステルダムを訪ねて ●●●

長友恵子



昨年の十一月二十一日、パリの日本文化会館で、非常利組織「小さな丸い図書館」主催、シュリアン・マレシャン館長の司会で、「紙芝居学びの日」シンポジウムが開かれました。

酒井京子紙芝居文化の会代表の基調講演「紙芝居の理論と歴史」でシンポジウムの幕が開き、野坂悦子海外統括委員の講演「海外における紙芝居の実践」が続きます。その後、文化の会の運営委員が紙芝居四作品を、日本語で演じました。演じる前にフランス語で概略を説明した作品もあり、集まった参加者には、紙芝居の持つ意義、おもしろさがしっかりと伝わっていました。『よしよ よしよ』（脚本・絵／まついのりこ）を上演した際には、会場全体が、日本語の「よしよ」のかけ声に包まれました。言語を超えた交流が実現したこの光景に、紙芝居が持つ共感の力を実感しました。

フランス側の登壇者からは、子ども達が自分達で紙芝居を作る活動も盛んだという報告がありました。フランスで紙芝居が今後どういう展開を見せていくのか、楽しみです。

シンポジウムの最後に、ミシェル・ヴァランティエーヌ「小さな丸い図書館」文化活動責任者が、『まつのりこのわらわの「ブックさん」』（脚本・絵／まついのりこ）を演じました。紙芝居文化の会がフランスで紙芝居活動を始めてから約二十年。その成果の集大成のような見事な演じ方で、会場は大いに沸きました。

翌二十二日朝、リヨンへと移動し、公共図書館で司書や紙芝居活動家を対象に紙芝居講座を持ち、続く二十三日には、別の図書館で、子ども達を前に上演し喜んでもらいました。付添いにお父さんの姿も多く、イクメン文化の浸透、かりを垣間見ました。

その後、アントワープへ向かい、地域にある全図書館を統括し、生活支援センターでもあるペルメーケ図書館で講座を開きました。参加者の中には、紙芝居理論の著作があり、各地で紙芝居の演じ方を指導しているインゲ・ウマンズさんの姿もありました。館内には紙芝居の常設展示コーナーがあったのですが、舞台付き自転車も置いてあり、貸出バーコードシールが貼られていました。学校などに貸し出されているとこのことで、日本との違いを感じました。

最後の訪問地はアムステルダムです。郊外の小学校で紙芝居の実演をしました。日本語で演じて、子ども達はじっと集中して見入ってくれて、これが共感の力かと再認識しました。

各地で、紙芝居が大好きな人達と出会い、大歓迎された旅でした。日本独自の文化である紙芝居が、人種、国境、言葉の違いをこえて、みんなにも愛されているなんて、個人的にも、励ましになりました。演じ方の統一という課題も感じましたが、子どもに限らず、大人まで結びつける共感の力に、明るい未来を感じた今回の旅でした。

(ながとも けいこ／翻訳家)

